

史談随想（農民の戦い）

幕末水戸藩党争と農民勢の動向 副会長 前澤瑞穂

鯉淵勢・河和田勢の成立とその戦跡

1 藩内党争に加担した農民とその背景

水戸藩幕末期における天狗党・諸生党の党争についてはよく知られているが、この事件に多くの農民が参加していたことはあまり知られていない。藩の党争の原因やその結果については省略して、農民の動向、就中、鯉淵勢・河和田勢について考えてみたい。

農民は村役人を中心とし、それぞれの立場や地域の状態に応じて、積極的に参加した者、あるいは自衛のために止むに止まれず参加した集団があった。

天狗党への参加は、郷校で学んだ上級農民、医者、神官らが多くみられる。彼らは郷校で学び「尊皇攘夷」に共鳴し、進んで天狗党に加担したと思われる。

一方、諸生党への参加は、止むに止まらない深刻な事情があった。それは「悪天狗」と言われた一部天狗派の暴挙に対する自衛抗戦であった。

「桜田門外ノ変」から半年後、万延元年（1860）八月、前藩主・斉昭が死去している。その四年後、元治元年（1864）三月、天狗党・藤田小四郎らが、尊皇攘夷・幕政改革を標榜して筑波山に挙兵した。七月には、幕府及び水戸藩からの天狗党追討令を受け、これに従って諸生党は天狗党追討の主軸を担っていった。

2 田中愿蔵隊の暴挙に対する農民の自衛手段

天狗党の目標は「幕政改革」であったが、田中は「討幕」による世直しを標榜していた。田中らはその資金稼ぎのために豪農、豪商からの強奪、火付けなどの暴挙（栃木市と土浦市）により、民衆の恐怖と憎悪の的になっていた。

これに対して、農民は自衛のための農民隊を組織し、さらに諸生党の武士勢に合流し抗戦した。諸生党は田中隊の暴挙を天狗党全体の非として農民を教唆し、協力を約束した。幕府も藩も、農民隊を天狗党追討軍と認め、武器を貸与して抗戦に当たらせた。

◆河和田勢について（第十回「内原郷土資料展」報より）

元治元年七月、河和田村郷士・平戸長衛門を旗頭とし、河和田、見和、中丸、萱場新田、飯島、金谷、大塚、加倉井、大足、牛伏、黒磯、有賀、田島の十三ヶ村をもって、自衛のために結成された。藩庁に協力することを申し合わせ、はじめ水戸城の要所や那珂川沿岸の警備に当たっていた。しかし、神勢館の戦い後、八月から九月にかけて、鯉淵勢と共に、長岡、秋葉、鳥羽田で戦った。

九月下旬には、県北の太田方面の警備に当たった。

十月には部田野原合戦に参加、更に、下旬には、諸生党の将・寛助太夫軍に協力して、那珂湊戦に参加、天狗党を敗走させた。

十月二十四日より太田、大宮、山方、舟生、鷲の子、馬頭で転戦し、戦力を発揮している。

十二月五日、水戸城中において、その功を賞されて後、お役ご免となった。

◆鯉淵勢について（第七回「内原郷土資料展」報より）

天狗党に恐れを感じ、八郷地方の連合勢や、近くの河和田勢の動きに呼応し、元治元年七月二十五日に、行動を開始した。

八月に入り、幕命により天狗党追討のため、藩の諸生党に組み入れられた。土地の地理に明るいために、案内役として先頭に立ち、戦場を駆けめぐった。合戦の激化する九月下旬には、幕府軍付属を命じられた。赤色と萌黄色の制服が支給され、「鯉」の肩章をつけ、正規軍と共に激戦に参加した。騒乱の鎮まった後、藩から褒賞が与えられた。

しかし、明治維新により、政権が逆転し、勝者となった天狗党から、追及を受け、苦しい時期を迎えることになった。

★元顧問・故来栖平造氏の著書より

この地域（茨城県内）で元治元年（幕府連合軍、市川諸生党、自衛及び報復の為の農兵隊）と（松平頼徳勢、榊原大発勢尊攘鎮派、武田・山国尊攘鎮派、田丸・藤田尊攘激派、潮来・小川郷校激派）が戦った。

この戦いで、鯉淵勢は雌雄を決する部田野合戦に参加し、多大の戦功をあげ恩賞を受けた。その後、彼らが太子方面へ逃走したので帰村した。

★宮沢正純氏の論文によると、

明治元年（1868）2月、「奸徒を掃除し、反正の実行・・・」の勅諭により、4月9日武田金次郎勢及び本圀寺党が京都を発し、五月水戸に到着すると直ちに、奸徒・朝敵に対し、暴虐きわまりない追求と殺人を行った。このような殺戮の為、3才以上の男子をすべて殺されると噂がひろまり、鯉淵勢をはじめ諸生党に加担した農兵隊のものは領外へ落ち延びた者も多数あった。その時の執拗な探索と過酷な処置は、現在まで土地の人々に語り伝えられている程であった為、やがて鯉淵勢への参加を口にする人々はいなくなり、記録は意識的に忘れられた。鯉淵勢の実態が不明な理由の一つはこのようなことにある。と述べている。これはその外の民兵隊についても同様であるが、詳細な史料が見つからない為、十分解明されていない。

（知恩 10 号より）